

カーバイド埋立地を水田に

水
俣

肥料いらぬ十万坪

奇病患者救済にも利用

新日窒水俣工場は、三月同市八幡立地十坪の水田化利用を計画、同市農政課の技術指導で同地



に試験田自坪をつくり土壌改善ならびに水稻栽培適否の研究を行つていたが、このほど二畝の成果をえを行つた。

思うから干町歩で六百石の収量がみこまれるし、幾城方の利用が可能なので稲率も上り、農作の換産作物栽培で年間千五百万円以上の収入源となることは間違いない。また土肥改良組合など事業主体をつくつて国庫補助をうける方法もあり、あらゆるところから意欲のある計画だ。と大飯判を押したもので今秋の検り秋の結果が期待されている。

計画にもとづき試験田の機軸はカーバイドかすの土に赤土、石灰、砂を混合した酸和土で五寸厚さに固め、耕土して山や畑などの土を二尺程度に横土してあるが、カーバイドかすの主成分は水酸化アルシウム、消石灰で固まると絶対に水を透さぬ性質をもっている。ので水田の底となつた場合、かんがい水がもれぬこと、酸性土質になるのを防ぐこともできるという利点があるが、かんがい用水は浄化した工場排水をパイプで送る方法をとっている。これに要する資材などは、いづい同工場手荷品を使用するので経費は抑へからず成功すればわが国で初めての科学水田が実現することになるわけで、耕地不足をかこつ地元農民間に大きな話題となつてい

得たので八月上旬十時から入新日窒総務部長、備田同会長、大崎市助役が出席して、同試験田の田植えを行つた。

同工場では工場から排出するカーバイドかすの捨て場として水俣川口の不知火港を使用してきたがつもりつて現在では八万坪の広大な埋立地となり、この秋までには十坪に達するものとみられるに至つた。このため同工場ではこの埋立地の利用についてあらゆる角度から検討してきたが、水俣奇病の影響で生活苦を招いた同市月の南周辺漁民の救済対策にも利用出来ることなら同埋立の水田化を計画水稻栽培研究を行つたもので、依頼をつけた市農政課では、水利も完全で立派な水田がでる。研究の精果最初一、二年間は肥料もいらぬのではないかと、思う。反収最低一石はいけると

試験田の成功を祈つて田植えする入江、鎌田の両部、次長